

殿村遺跡とその時代—虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代—

信州大学副学長 笹本 正治

謎は深まる

みなさんこんにちは。信州大学の笹本正治です。

先ほどの竹原さんのお話、非常に面白かったです。お話を伺って、この講演をするにあたり改めていろいろプレッシャーを受けました。にもかかわらず、大変忙しかったものですから、内容をしっかりと練ってきておりません。このため、みなさんのお顔を拝見しながら、適宜話をさせていただこうと思っています。

先ほどの報告を聞いて、みなさんは殿村遺跡がどういうものだと結論が出ましたか。話を聞けば聞くほど遺跡の性格が分からなくなりますね。実のところ、発掘をすればするほど謎が深まるというのが実態です。私は最初、殿村遺跡で会田氏の館跡が発掘された、しかも日本で一番古い石垣が出てきた、という話を耳にして、自ら見学にやってきました。

その時に私が興味を持ったのは、堀からたくさん出てきた箸といわれたものでした。箸が堀に捨てられたという理解ですね。食事の道具である箸だけが堀、すなわち水の中から大量に出るというのはおかしいですね。その時に私は箸ではなくて斎串ではないかと思ったのです。斎串とは、榊や笹などの小枝に幣をかけて神に供えるもので、ここから派生して、物を刺す木や竹の串の総称のことです。つまり、神様や仏様に捧げるため、この箸状の上に御幣が付けられたのではないかと思ったのです。皆さんもご存じのように御幣は祭祀に際して神様に捧げるために、2本の紙垂を竹または木でできた幣串に挟みます。

これまで言われてきたようにあの石垣のすぐ背後に居館が設けられていたとしたら、堀の内側には土壘と呼ばれる土の塀など防御用の施設があって、簡単には居館の中には入れないようになっていたはずですが、土壘の跡は見つかっておらず、すぐ近くに建物の跡と思われるものが出ています。

会田氏館跡と呼ばれてきた遺跡の実態は何か？これまで、教育委員会は館と呼ばれていた大地を発掘してきましたが、分からぬことばかり、課題ばかりが出てきたのです。今回の発掘においても、成果としての事実はいっぱい出てきているのですが、理解をめぐって右往左往している状態です。

私たちは研究を通じて、分かることよりも理解できないことが増えていきます。それでも、発掘成果をもとに分かったことをまとめながら、自分なりにかつての姿が浮かび上がるような一枚の絵を描いていきたいと思うのです。それを通じて私たちのふるさとはどういう場所で、いかなる歴史を持ち、将来どうなつたらいいのだろうか。契機になれば幸いです。

ですから、これから私がする講演の内容などについて、ただ事実を知っていたただくだけでは将来につながりません。みなさん一人ひとりが事実を知り、さまざまなことを考えて、よりよい未来づくりにつなげていくことが大事です。そのための素材として、城や館、宗教施設などがなぜ必要だったのか、それはいったいどういう意味を持っているのか、こういったことをみなさんの未来のために、お子さんやお孫さん、そして100年、200年先の人たちのために、考えていただけたら幸いです。

美しい会田

最初に見ていただきたいのは私が撮影した、美しい私たちのふるさと会田の風景です（口絵1－1）。背後に控える虚空蔵山からはじまって、会田地区の中心部分に至るまで、美しいですね。この素晴らしい私た

ちのふるさとを点として考えるのではなくて、面として考えてみたらどうでしょうか。背後にある山容の綺麗な山、そして私たちのすぐ近くに広がる水田、この写真に写る景観を私たちは美しいと思うはずです。もし、みなさんも美しいと考えるのでしたら、私たちの心の内にある美しさの評価基準は何なのか、そういうことをも少しづつ気に懸けていただければと思います。

古図に見る会田

今回、殿村遺跡の発掘に伴って、発掘担当者たちは改めてこの地域の歴史を考えてみよう、そのためにどういった材料があるのかと、地元に入り古文書や伝承などを探しました。その結果、いろいろなものが出てまいりました。

次に見るのは、文禄3年（1594）、ですから関ヶ原合戦よりも7年前に描かれた、「会田郷往古之略図」と題された古図です（図24）。残念ながら、これは原本ではありません。近代に写されたものですけれども、これが作られた1594年に、こうであったということを「後世のために記し残し置くもの也」と、左側に書いています。つまり、400年以上前の人たちが、将来どういうことを考えるか分からない私たちのために、当時の状況を書き残しておいてくれたものなのです。

図を見ると、虚空蔵山からはじまって集落の状況など、私の撮った写真と景観がよく似ています。写真と同じように虚空蔵山の一番高い所には「鎮守虚空蔵尊」と記され、上部に鳥居が記されています。その下に「城廓」と書かれていて、その左下には「出丸」も描かれています。「城廓」の右側には「會田小次郎廣政本城也、本姓滋野」という、この地に参り、會田と改めし者なり」と注記されています。

今私たちが問題にしている「殿村」の西にはL字型の堀のようなものがあります。この堀の形態はこれまでの発掘の結果とは合致しておりませんが、わざわざこういうものが描かれているということが重要です。しかも、その前には大きな鳥居があります。

記されたそれぞれの記載内容は非常に面白いものです。例えば、中央の「人埋堂」と記されている左上に「この堂は軍人の死人也、また百姓の死体を埋める地」と書いてあります。死体を埋めた場所だと説明がついているわけです。

今回の話に関わる場所については、虚空蔵山の「城廓」と書かれた右側に「會田小次郎」の名前が記されています。その南側、殿村との間に「知見寺」も出ております。この周辺を詳しく見ると、「小岩井庄」、「殿村」、「岩井堂」、「會田郷」などがあります。殿村の右側には、「大手門を改め大門」とあります。大門というのは、ひょっとすると宗教施設の大門の意味かもしれません。このように、この図はいろんなことを考えさせてくれます。

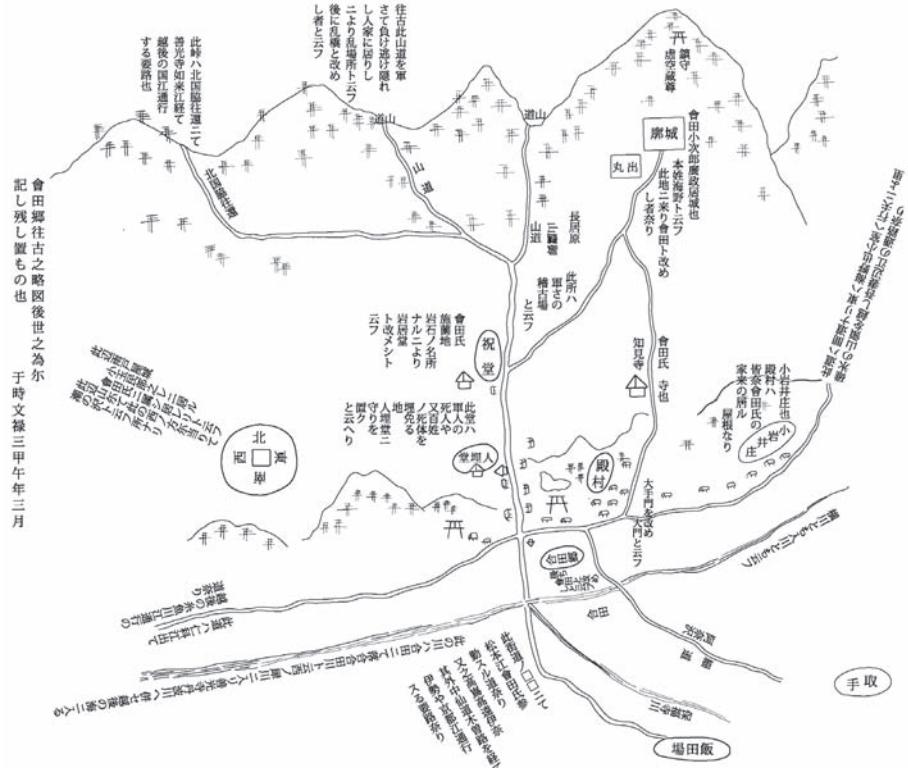


図24 文禄3年「會田郷往古之略図」(写しをトレース)

ちなみにこの図の中の文章の書き方は、中世にさかのぼる可能性があります。というのは、ひらがながいっぱい用いられています。埋めるという部分でも、わざわざ埋めるという「埋」の字の下に、免ずる「免」の字を書いて「め」と古い形の平仮名書きがされ、その下に「地」というふうに、全体の書き方が古いのです。

会田岩下氏

城郭に関係した部分に出てくる会田小次郎広政ですが、一般的な説明によれば小笠原氏に属した会田岩下氏は信玄に降ったといいます。つまり、彼が生きたのは武田信玄の生きた時期と重なっていたようです。

山梨県に残る記録その他によれば、天正 10 年（1582）の武田氏滅亡時には、岩下惣六郎昌盛、右近昌延が殉死しました。そして、7 月に小笠原貞慶が旧領の経略にとりかかっても、会田岩下氏と家老の堀内氏は小笠原氏に降らず、上杉景勝を頼りました。

武田信玄が攻めて来た時、信濃国の守護、この地域の最も上にいた領主は小笠原長時でした。長時は武田氏に追われてから、あちらこちらを転々としました。ところが武田氏滅亡の時に、その子である小笠原貞慶は、徳川家康の援助によって信濃府中（現在の松本市）に帰って来ようとした。その時、私たちのふるさとにいた会田氏は、小笠原につかず上杉氏の方に味方したのです。これは興味深いですね。

武田氏滅亡後、現在の松本城にあたる深志城をとったのは、織田信長と結んだ木曾義昌でした。ところが、織田信長が本能寺の変で没すると、木曾義昌は後ろ盾がなくなり、この地域は上杉氏、それから小笠原氏の背後にいる徳川氏、木曾氏の背後についた豊臣氏、さらには北条氏がねらうのです。天正 10 年以降、日本で一番激しく取り合いが行われそうな場所が、会田を含めた松本平なのです。この一連の戦いに際して会田氏は上杉に味方し、当主の会田小次郎広政が幼少であったため、家老の堀内越前守が中心になって四賀地区の矢久の砦で小笠原氏と戦いました。11 月に矢久の砦が落城し、小次郎は青木村まで逃れたものの自刃し、会田氏は滅亡したと言われています。多くの方は戦国時代というと武田信玄、上杉謙信の時代のイメージが大きいのですが、この地域については謙信・信玄より後の時代の方が面白いのです。

知見寺と廣田寺

もうひとつ、この地域を知る鍵になるのは知見寺です。現在、私たちのふるさとを代表する素晴らしいお寺に廣田寺があります。私は四賀に来るたびに廣田寺にちょっと寄って「いいなあ」と思っています。

「会田郷往古之略図」に見える知見寺というお寺は、会田氏の菩提を弔うため現在地に伽藍を移した廣田寺の前身で、会田の岩下氏により中興されて、東の山を越した知見寺沢にあったとされています。小笠原氏に寺を焼かれて、住職が岩下豊後の位牌を持って逃れ、知見寺を廣田寺として再中興したと伝承されています。なお、廣田寺については、里山辺の広沢寺の 4 世が開山したという説もあるようです。

いずれにしろ、この寺ができたのは戦国時代ということになります。ともかく、この会田地域においては会田氏の存在が全面に出てまいります。会田氏の館跡と伝承されてきた場所には、先ほど見ました鍵形の池あるいは堀ともみられるものが描かれています。

地域の城数

最初に出した写真(口絵 1-1)をちょっと思い出して下さい。私たちが忘れていけないのはこの風景です。私たちのふるさとで大切なのは、この虚空蔵山が控える全体としての風景なのです。虚空蔵山には「鎮守虚空蔵尊」が祀られています。つまり、山全体が基本的には宗教施設です。

皆さんは戦国時代に四賀地区にどれくらいの山城があったと思いますか。一応ここに 10 の山城をあげておきました（図 25）。みなさんはこの数の多さにびっくりしませんか。私はよく学生に「長野県全体でお

城がどれくらいあると思いますか?」と尋ねるのですが、多くの者は「10以下です」と答えます。「ではあなたのお城のイメージはどんなですか?」と聞きますと、松本城のイメージなのです。つまり石垣の上に天守閣を構えるお城です。ですから、松本城の次は小諸城、松代城などといって数えるので10以下になるのです。しかし、四賀地区だけでもこれだけあるのですから、中世に現在の長野県域にあった居館・山城の数は、おそらく3000近い、もっとあるかもしれないほど多数なのです。

近世の松本城のような、石垣の上に天守閣が築かれたものだけがお城ではありません。中世には、一つの集落に一つのお城があると考える方がいいくらいの数なのです。江戸時代の村だったら必ず一つはあるのが鎮守、氏神です。山城は村の氏神さんと同じくらいの数を持ち、同じような役割をしていたのがというのが、私が考えている山城像です。

虚空蔵山城をめぐって

特筆すべきは、一般的に会田城あるいは虚空蔵山城と呼ばれている城です。標高1139mの虚空蔵山南面の山腹に、中ノ陣城、秋吉城、うつつ城などが設けられています。これを全体として一つの城と見るのか、それとも一つひとつが独立した城とみるのか、これによってそれぞれの城の性格も役割も違ってきます。私たちはこのことすら、まだはっきりイメージができていません。

次に見ていただきたいのは、長野県で最もお城を歩いている宮坂武男先生が、かつてのイメージはこんなふうだったのだと描いてくれた、虚空蔵山城の概念図です(図26)。一番上の峯ノ城から始まって今問題になっている中ノ陣城、秋吉砦、そして今回発掘された場所が描かれています。もしこの通りだとした

ら、想像を絶しませんか。私たちの目の前に見える虚空蔵山の尾根は、すべて先祖が手を入れて地形を変えていくのです。人間が山のすべて手を入れ、大地に刻みを入れている。

それなら、これほど手を入れなければいけない理由はいったい何でしょうか。私たちはそこから何を読み取らなければいけないのでしょうか。

四賀地区の山城

- 1-鷹巣根城(錦部) 荘谷原五郎の築城と伝えられる。
別称・莊谷原城
- 2-見場城(錦部)
- 3-七嵐城(錦部) 『高白斎記』(武田信玄の家臣が書いた日記)に見える
莊谷原の城。太田氏の城。別称・荒神尾城
- 4-保福寺城(錦部)
- 5-会田城(虚空蔵山城) 虚空蔵山(標高1139メートル)の南面山腹に中の陣城・秋吉城・現城などが配置される。
- 6-召田城(中川)
- 7-矢久の城(中川矢久) 覆盆子城
- 8-岩淵城(中川藤池)
- 9-笹沢城(五常落水)
- 10-山笹城(五常西の宮)

図25 四賀地区の山城



図26 虚空蔵山城の概念図(宮坂武男氏画)

明治時代の虚空蔵山城理解

次は、これは明治 11 年（1878）くらいを中心とした各町村から提出した、地域の歴史や伝承などを集めたものを集め直した『長野県町村誌』に出ていた、「中川村小岩井地會田氏山城墟」です（図 27）。虚空蔵山城が明治の人たちにどういうふうにイメージされていたかが読み取れます。

中央に「秋吉城砦」が見えています。秋吉城の砦だと言うのですから、秋吉城は当然独立した城です。その左には「會田氏山城」と書いてあります。これが中ノ陣ですね。この二つの城の間に、先ほど説明のあった5段から成る石垣が出てきます。一番上に井戸跡が示され「中陣井戸」とあります。その上にはさらに巨大な石垣が築かれて「馬場」になっています。もしこの通りだとしたら、会田氏の山城である中ノ陣城は大きな馬場を持ち、今回の発掘箇所に井戸がある巨大なものになります。

江戸時代の虚空蔵山

次に見ていただきたいのは、江戸時代の虚空蔵山の状況を示した絵図です（図28）。これも興味深いですね。

最も高い所に描かれている虚空蔵山の尾根は、先端が尖ったいくつもの峰の集合体のようで、下との間には「ごろ路」と説明されています。これが江戸時代の人

右に「石垣これあり」と描かれているのが秋吉砦、中央部分の三つからなる平の上に「見立社」とあるのが現在発掘している石積み群です。その左に平が三つあるのが中ノ陣城にあたります。

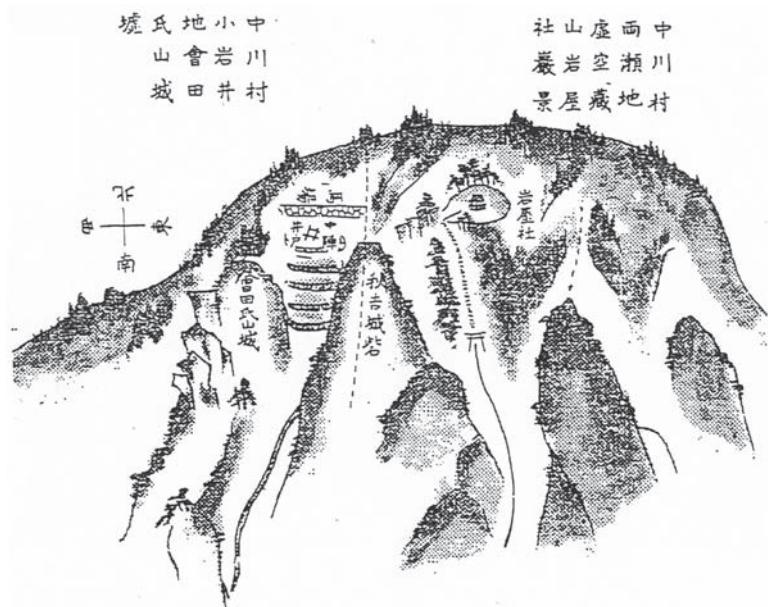


図27 明治時代に描かれた虚空蔵山城（『長野県町村誌』）



図 28 江戸時代に描かれた虚空蔵山城（万延 2 年・1861 年）

虚空蔵山の山頂

もう一度宮坂先生の図に帰ってみたいと思います（図29）。宮坂先生は踏査された結果、図のように山城を理解されています。

虚空蔵山の一番高い部分に「峯ノ城」があります。中ノ陣城、秋吉砦と峯ノ城との関係が古文書などではよく分かりません。天文 22 年（1553）4 月 3 日に武田信玄が会田虚空蔵山に放火していますが、その虚空蔵山とはどの場所か、まだ不明なのです。可能性としては峯ノ城があります。ともかく、宮坂先生の縄張



図 29 虚空蔵山城縄張図（宮坂武男氏作図）

図からしても、虚空蔵山の尾根という尾根はすべて人の手によって改変されていることは間違ひありません。

みなさんちょっとご協力ください。虚空蔵山の山頂まで登ったことのある人は手を挙げて下さい。すごいですねえ、こんなにたくさん的人が登っているのですか。私は岩屋神社の方向からだと大変なので、あまり登りたくないかもしれません。ただし、松本市教育委員会の人たちは仕事熱心でして、もう二度と登りたくないと言っても、また登らされるでしょうね。

けれども、虚空蔵山の頂上は平らになっています。自然の山はこのように平らではありません。山頂で確認しますと、きちんと人の手が加わって、テラスになっているようです。しかも、その東端で尾根にわざわざ堀切を入れています。頂上の平らが一番大事な守るべき場所であり、東側から攻めて来られると危ないと思って、対応したのでしょう。ですから、東側には防御のためにいくつも堀切が掘られています。あの狭い尾根がお城として機能するように、たくさんの堀切を入れているのです。

ところで山頂に行ってみた人で、あそこで生活しようという人はどれくらいおりますか？ 1週間生活してもいいぞという人がいたら、手を挙げてください。誰も手を挙げないですよね。あそこに逃げこんでも、長期間の生活はできません。下まで水を取りにいくだけでも大変です。山頂に逃げ込んでも長期間の戦いの継続は不可能ですから、峯の城に入ったらもう戦争する気がありませんと言っているようなものです。その下の方に、中ノ陣や秋吉砦のようなものがいくつか展開されています。

私はおそらく峯ノ城が一番古いお城だろうと考えています。それは峯ノ城と呼ばれるように、虚空蔵山の頂上にあることが意味を持つと考えるからです。

宗教ゾーンと城

この講演を聴いての帰り、周囲に誰もいない道端に 1000 円札が落ちていました。この 1000 円をどうするか、みなさん全員目をつむって想像してみてください。黙って持つて帰るという人は手を挙げてください（挙手）。あまりおりませんね。さすがに四賀の人たちは道徳心がありますね。次に、そのままにしておくという人は挙手してください（挙手）。1000 円程度には目もくれない裕福な人が何人もいますね。3 番目、警察に届けるという人（挙手）。あれ、一度も手を挙げなかつた人が何人もおられますね。

じゃあもう一度聞きます。今度は二つだけ、警察に届けるか黙つてポケットに入れるかで選んでください。みんな目をつむったままでいてください。そっとポケットに入れる人、手を挙げてください（挙手）。素直な人たちですね。警察に届ける人（挙手）。素晴らしい人たちですね。

最後にもう一回だけお尋ねします。そっとポケットに入れると考えた人だけまた手を挙げて下さい（挙手）。そのまま手を挙げていて下さい。善光寺の中に 1000 円札が落ちていました。あるいは、廣田寺の境内に 1000 円札が落ちていました。それでもそっとポケットに入れて自分のものとする人は手を上げ続けていてください。わずか二人とおそらく先ほどの人数の 10 分の 1 以下になってしまいました。普通の場所に落ちていたら持ち帰る人も、寺の中ではほとんど自分のものにしないのです。

宗教施設の中では私たちは行動の仕方が違ってくるのです。一般的に宗教施設の中では泥棒や、乱暴する

人の数が圧倒的に減ってきます。逆に言うとお城も、信仰施設の中に入ってしまえば、敵から手出しがされない可能性が大きくなります。日本のお城には神様の名前がついているのがたくさんあると思いませんか。これは神に守ってもらうという意識とともに、かつて聖域だった場所に城が設けられたことを示すのではないでしょうか。

もともと宗教の場だったところにお城を設けるとすれば、それは何のためでしょうか。城を築くのは安全を確保してほしいからですよね。戦うための道具だったら、あんなふうに高い山の上に、防御主体でつくりますか。中世は現代と異なって、はるかに人びとの神仏に対して帰依する心が強かった時代です。そんな時代において自分たちの安全を守ろうとする場合、宗教施設の中に入って、ここで人殺しをすると神様仏様が見ていますよ、神仏の前で人を殺すような行為ができるのですかと、敵を脅しながら安全を確保することが考えられます。

山城の中にも、宗教などを前提にして安全確保をしたいものと、本当に戦うために築かれたものなど、多様性があるようです。

『信府統記』の虚空蔵山城理解

松本藩の殿様の命によって編さんされ、享保 9 年（1724）12 月に完成した、『信府統記』という本には、小岩井村の秋吉の古城地が村より北北東の 14 町の所にあると書いてあります。「中野陣古城地」の記載もありますが、今の書き方と違い、「ノ」は「野」の字が用いられています。小岩井村より丑寅の方向、すなわち北東の 14 町ほどの地に、城があると書いてあります。

「會田虚空蔵山古城地」は会田町より丑寅の方向 1 里 4 町 18 間の地です。ここには、「本城の平（東西二丁、南北八間）、石垣二段あり。城主会田小次郎広正居住せり」と説明しています。さらに、「会田氏の先祖^{うんの}海野幸継の二男、初めてここを分領して会田次郎と号す」などと続けています。

武田信玄に服属してから、その後の小笠原貞慶の時期に至るまでの会田氏について、江戸時代の理解が『信府統記』には説明されているのです。

保福寺の番所

もう一度、私たちのふるさとの歴史を考えてみましょう。武田信玄が攻めてくる前、応仁元年（1467）12 月 14 日に会田の岩下海野満幸が村上氏と海野の地で戦って討ち死にしました。村上氏というと、後に武田信玄を 2 度までも打ち破ったことで有名な村上義清で知られますが、信州における小笠原と並ぶ二大勢力の一つでした。会田の岩下氏はその村上氏と戦ったことがあります。

文亀 2 年（1502）頃に保福寺城が築かれたようです。

永正 10 年（1507）には、小笠原長棟が保福寺に番所を置いたとの説明があります。番所というのは通行者や荷物などの検査を行い、税の徴収などを行う役所です。ということは、番所を置くと相当な関銭が入るくらい、保福寺は交通の要衝で、多くの人が行き交う宿場だったといえます。番所を設けた小笠原長棟という人物は、現在の松本市里山辺林に館と山城を築いた信濃守護でした。

小笠原長時と武田信玄

天文 17（1548）年 7 月 19 日に有名な塩尻峠の合戦が起きました。この合戦は、諏訪を取った武田信玄が甲斐に戻ったので、小笠原長時が画策して諏訪でいろいろな混乱を起こさせたことから始まりました。この情報を得た武田信玄は、ゆっくりと時間をかけて信濃に軍を出し、1 週間くらいかけて甲斐から信濃に入りました。合戦の前日に武田軍はまだ茅野にいたのですが、19 日の朝 6 時ごろ塩尻峠に陣を張っていた長

時勢を急襲しました。これまでゆっくりした動きをし、まだまだ遠くにいると考えていた武田軍が、まさか早朝に攻めてくるとは思わず、小笠原方は油断して寝ぼけ眼で戦って、大敗を喫しました。これが大きな契機になって、小笠原氏は松本平を去って行くという流れになります。

江戸時代に書かれた『二木家記』によりますと、この時小笠原長時の軍には苅谷原氏、つまり四賀地域の人たちが参陣していたようです。

その2年後の天文19年、信玄が小笠原長時を林城で破りました。この時も小笠原氏の味方の中に苅谷原氏が入っていました。このこともあって、天文19年8月10日（1550年9月30日）に武田軍が会田岩下に出陣したのです。小笠原長時は10月23日に村上義清の支援を受けて平瀬城に入りました。

それから3年後の天文22年（1553）、信玄が苅谷原城主の太田長門守を生け捕りにしました。この年の4月3日、信玄は会田虚空蔵山に放火して、苅谷原も城割をして鍔立しきわりを行いました。刈谷原にあった城を壊す儀礼をし、武田氏用の城につくり替えたのです。

苅谷原城と城割

苅谷原氏は相当大きな勢力を持っていました。信玄は苅谷原の城を手に入れると、わざわざ城割をしたことが注目されます。

城割の意味を分かりますか。今はどうか知りませんが、昔は家を潰す時にいろいろな儀式を行いました。例えば、今から35年ほど前、私の山梨の実家を建て替えた時に、トイレ、昔は汲み取り式のトイレでしたが、それを埋めるためおまじない的な儀式をしました。今でも井戸を埋める時には竹の節を取って、井戸が息ができるようにと儀礼をして埋めます。

お城といえども、生命を持つと中世の人には考えられていたのです。お城には築いた人の魂が分与されていると考えられていましたので、前の領主が使っていたお城をいったん壊して、前の城主との関係を断ち切るという儀礼をしたのです。それを城割と言います。松本市内の山城を歩きますと、出入口が必ず壊されています。あれはおそらく城割の結果でしょう。家でもそうですが、一番大事なのは出入口ですから、そこを壊して、城の生命を絶ったのです。

その上で、武田信玄は鍔立ということをしています。天文22年にわざわざ苅谷原において、古いお城の命を奪った上で、新しいお城をつくる時の儀礼を行ったのです。このようなことをしているのは、苅谷原がそれだけ重要だったことを示します。ところが、虚空蔵山の方では火だけをつけて、同じようなことをしていません。

信玄は天文22年に苅谷原の地を海野氏に与えようとしたのですが、当時苅谷原城主だった今福氏から同意が得られませんでした。同年には信玄が平瀬城を破却して、海野下野守を深志に招いて、新村の地300貫を替地として与えました。本来苅谷原において渡そうとした土地の代わりをこの時に渡したのです。深志というのは、深志城のことで、現在の松本城です。

天文22年に上杉謙信軍が会田虚空蔵山城を攻め落としました。興味深いのは松本のすぐ近くでありながら、会田の地が武田と上杉の勢力との境目だったことです。

日本きっての係争地

先ほども触ましたが、大事なのは武田氏の滅亡後のこの地域の歴史です。天正10年3月20日（1582年4月22日）、木曾義昌が織田信長から安曇・筑摩郡を加増されました。木曾の福島を根拠にしていた義昌は、信玄の娘を妻していましたが、勝頼を裏切り織田氏の方について、武田氏滅亡の原因をつくりました。その戦功として、木曾義昌は信長から安曇・筑摩両郡を与えられたのです。

ところが、天正 10 年 6 月 2 日（1582 年 6 月 21 日）、本能寺の変で信長が死んでしまいました。これによって、わずか 3 ヶ月足らず前に織田氏の勢力下になったばかりの旧武田領国は大きな混乱に陥りました。かつての領主たちは旧領を回復しようと動きました。その一人である小笠原長時の子供の貞慶は、6 月 12 日に信府に帰ってきて、後序勘兵衛に忠節を促しました。後序氏は現在の塩尻市、朝日村等に勢力を持っていて、武田信玄によって滅ぼされた三村氏の子孫でした。

7 月 2 日に小笠原洞雪斎（貞種）、この人物は小笠原貞慶の伯父さんですけれども、彼が上杉景勝の支援を得て深志城から義昌を追い出しました。義昌の次に深志城を取ったのが小笠原洞雪斎なのです。ですから、実質的には上杉氏の勢力が深志城を押さえたのです。

この後、7 月 5 日に徳川家康の家臣である榎原康政は深志城調略について後序勘兵衛尉の来府を求めました。7 月 10 日には小笠原貞慶が深志城を回復しようと、恩賞をもって百瀬石見守を誘いました。このような下工作の末に、貞慶は 7 月 15 日にやっと深志城から洞雪斎を追い出しました。これを契機にして貞慶は次第に松本平で勢力をを持つようになるのです。

11 月 5 日、会田氏が上杉景勝の支援で矢久城に立て籠もりました。この地域は決して小笠原氏の言う通りにはなっていないのです。ところが、この 5 日に小笠原貞慶軍が攻め込んできて、城将の堀内越前守が討ち死にし、矢久城は落城しました。

翌年、小笠原貞慶の家臣である赤沢式部少輔・古厩因幡守・塔原三河守が謀反を企てましたが、2 月 12 日に貞慶は式部少輔を自殺させ、ついで因幡守・三河守も誘殺しました。

天正 12 年 3 月 18 日（1584 年 4 月 28 日）には、小笠原軍が上杉方の青柳城（筑北村）を攻めて城将を追い出しました。この日、上杉景勝は海津城の上条宜順などに青柳城将を支援するよう命じ、4 月 21 日上杉軍が小笠原軍を麻績城（麻績村）で破りました。

つまり、天正 10 年から 12 年くらいまでにかけて、この地域一帯は小笠原対上杉の戦いの場になったのです。小笠原の背後には徳川家康が控えていました。こうなると黙っているわけにいかないのが、正式にこの地を得ていた木曾義昌です。義昌は当時最も勢力を持っていた豊臣秀吉と結びついて、他の勢力に対抗しようとしました。

こういう状況がすべて終わるのは天正 18 年（1590）です。同年 1 月 9 日に豊臣秀吉は上杉景勝に援軍を送ることを手紙で知らせて、小笠原貞慶との戦いをやめさせました。同年 3 月から 7 月にかけて小田原征伐が行われ、戦後家康は関東に移封となり、信濃の多くの領主がこれにしたがいました。

私たちが考えなければいけないのは、この地域が私たちの思う以上に豪華キャストによる戦いの場となつた事実です。武田信玄対上杉謙信の戦いは、所詮山梨県対新潟県といったレベルの戦いです。これに対して天正 10 年の戦いは、北条氏が佐久郡を取りますので北条氏政は出てくる、上杉景勝は出てくる、豊臣秀吉は出てくる、徳川家康は出てくると、戦国が終わろうとする頃、日本全体を押さえる最後の豪華キャストが勢揃いしてこの地域で小競り合いを繰り返していたのです。

大規模なテラス

さて、私が興味深く思っているのは中ノ陣城の東側の、先ほど報告があった発掘の結果です（図 30）。しかしながら発掘成果は、分からぬことばかりです。

もしあそこが城の中だとしたら、少なくとも何年か使われていたはずです。継続的に使われた城なら、どういう建物が作られるのでしょうか。発掘の結果は、一度しか使われない掘立柱の建物が出た程度でした。よそのお城の発掘を見た経験のある人なら、きっと柱穴の少なさと、発掘品の乏しさにびっくりすると思います。大規模なテラスを造成しながら、そこには建物が 1 回ちょっと建てられただけなのです。しかも、

掘立柱の建物ですから、せいぜい小屋です。これだけ大規模に石垣を積んで造成していながら、その平では1回小屋がつくられて終わり。これはいったいどうしてなのでしょうか。

石垣について

次に、問題となっている石垣を見ましょう（図31）。最下部には石垣のならびより前面に出るよう石が置かれ、その上に石が積まれています。下の石の配置によって石垣が前の方にせり出さないようにしているのです。ただ石を直角に積み上げていったら、石が滑って、あるいははらんで、崩れてしまう。だからまずは最下部の石をこれから積む石が滑らず、せり出さないように配置して、その後ろ側に石を積んだのです。

でもよくよく考えてみてください。これはプロが積んだ石垣なのでしょうか。石がいっぱいある所だったら、これくらいは私でも考え、実施すると思うのですが、いかがでしょうか。石の使い方を見ると、上に大きな石を置いているにも関わらず、その下の石は小さい。普通なら石垣を安定させるために、下の方に大きな石を置いて、上方には小さな石を置きます。石垣作りのノウハウをあまり理解していないように感じるのです。現場に行っていただければ分かりますように、あそこはいっぱい石があります。大量に石のあるところで平地をつくろうとしたら、いやでも石垣を築くことになるのも事実なのです。

現状では石垣の下に石が散乱しているところもあります（図32）、この状況はいったい何を意味するのでしょうか。あるいは技術がなくてこうなったのでしょうか。それとも意図的に壊されたのでしょうか。

次の写真を見てください（図33）。この積み方だと下に大きな石を置いて、上方には平石を横に積んでいくので、石垣として理にはかなっています。しかし、きちんとした石垣ならば、横に目地が通るように石を並べますが、ここでは横に線が通っていません。

松本の山城と石垣

ここで松本平の山城に残る石垣と、今回の発掘場



図30 虚空蔵山城跡の発掘状況（平場1）



図31 平場1西端部の石積み



図32 虚空蔵山城の石積み①（平場群）



図33 虚空蔵山城の石積み②（同）



図 34 桐原城の石積み①（主郭）



図 35 桐原城の石積み②（主郭周辺）

所の石垣と比べてみたいと思います。

桐原城の石積みから見ましょう。この石垣は先ほどの写真のものより一つひとつの石が少し大きく、一定の大きさの石を用い、目地が綺麗に横につながるように積まれています（図 34）。

この写真でも一部理解できるように、石垣の下には石が散乱しています。この石をどのように理解したらよいのでしょうか。当時もこの状況だったのでしょうか、それとも破城・城割の結果こうなったのでしょうか。

私にとって衝撃を受けたのは肥前名護屋城の跡でした。みなさんは佐賀県唐津市にあるこの城に行ったことがありますか。肥前名護屋城は豊臣秀吉が朝鮮を侵略する基地として築かれた城ですから、次に政権を握った徳川家康によって破壊されました。それも、壊したということが視覚的に分かるようになっています。壊している状況が最も分かるのは海の側です。徳川家康は朝鮮と和平交渉を行い、朝鮮通信使などに来てもらうため、私たちはかつての豊臣政権とは違います。私たちは秀吉政権とは関係がないので、あのように城を壊しているのです、と主張しているのです。このために、朝鮮通信使など朝鮮側から海を越えてきた人たちに分かってもらえるよう、海側で見えるようになっているのです。

みなさんお城をつくる時の石垣で、一番大事な場所知っていますか？隅の部分です。日本の城の石垣は、さんぎ算木積みという積み方をしていて、最初にコーナーから積み始めるのです。石垣を積む基準になるのが隅ですから、壊す側ではここから潰していくのです。肥前名護屋城の場合、破壊したことが分かりやすいように、遠くから見るとコーナーだけでなく、のこぎりの刃のようにギザギザに見えるよう破壊されています。それと同時に入口、つまり虎口こぐちを壊します。写真（図 34）の石垣が自然に壊れたのか、それとも城をもう使わなくなった時に意図的に壊したのか。これも大事な観点です。

次の写真も桐原城の石垣ですが、見ていただければ分かるように石積みの高さやテラスのあり方など、今回の発掘地点の石垣とよく似ています（図 35）。石積みと後ろの平が3段構造になっている状況が分かります。防御をきつくするためでしたら、石垣は一気に高くしてしまった方がいいですよね。このくらいの高さだったら江戸時代の技術では、一気に築き上げています。この時期はそこまでの技術がないから、このように少しづつ積んで、セットアップして、少しづつ高くしているのです。この石の積み方、この石の大きさは先ほどの虚空蔵山城の石垣とはまた違います。

私が見ている限り松本で最も素晴らしいと思う城の石垣は、やまべ山家城のものです（図 36）。みなさんは行ったことがありますか？写真を見て気がつくと思いますが、ここでは石の大きさがほぼそろっています。そして石垣の目地が横にほぼ通った形になっています。しかし、この石積みはコーナーから積んでおりません。松本城などの織豊政権下以降につくられた石垣は、算木積みによって石を長い短いと交互に組み合わせながら一番隅から積んでいくのに対して、これらの城の石垣には隅がないのです。全体としてカクカクしたもの

でなく、丸い形になっています。

山家城の石垣がどのくらいすごいかというと、高さが垂直に2、3m以上もあるのです。しかも石の大きさがそろい、全体が曲線をなしていて、とても美しい石垣です。現況の山家城ができたのは天正10年から18年の間、とりわけ13年までの間だと私は考えています。この石積みの技術から見たら、同じ時期につくられたと考える秋吉砦と中ノ陣城の間にある石積みの技術は、間違いなく落ちます。これをどう考えたらいいでしょうか。

再度、今回の発掘現場の石垣を見ましょう（図37）。右端の巨大な石は奥側（左側）に続く石垣と連動するようになっています。崩れ方などからすると、石積みの技術はそれ程高い技量に見えません。しかも、石積みの後ろは斜面のままでですね。何故こんな形になっているのでしょうか。今まで私たちは何度もこの地を歩いていたのですが、今回発掘のため周りを整理すまでこの石垣にほとんど目を向けませんでした。石垣で造成された畑が荒れているとしか思えなかったのです。それが、発掘をしてみたらこれまで報告のあったような状況になったのです。



図36 山家城主郭の石積み



図37 平場群最下段の石積み

虚空蔵山の意味

次の写真はこの地域を考えるのに際して最も重要な鍵になる虚空蔵山、会田富士です（口絵1-1）。何々富士という山名を持つ山は全国にありますが、中信地方で富士山という名前を冠するのは、おそらく安曇野の有明山（有明富士）とこの虚空蔵山（会田富士）です。いつも私がいいなあと思うのは高速道路を松本から長野方面に行く時、会田川の谷からこの山が見えた時で、山容がまさしく綺麗な富士山です。

長野県で国土地理院の地形図に記載されている虚空蔵山は5つもあり、ここ以外に上田市・飯田市・佐久市・長野市に鎮座しています。『日本山名総覧』で見ますと、同名の山がどれだけあるかの順位では26位、28位にも及びます。

このように虚空蔵山という山の名前を理解するためには、この地域のことだけを考えてもだめです。虚空蔵菩薩という仏教世界から、もう一回あの山の意味を考えなくてはいけません。一般的に虚空蔵山は虚空蔵菩薩が祀られていることをもって山名にしています。虚空蔵はアーカシャ・ガルバ、「虚空の母胎」の意味の漢訳だそうです。虚空蔵菩薩とは広大な宇宙のような無限の智恵と慈悲を持った菩薩の意味で、智恵や知識、記憶といった面での利益をもたらす菩薩として信仰されています。会田や四賀地域の人たちが昔から虚空蔵菩薩を拝んでいるということは、みなさん智恵と慈悲に対して大きな尊敬心を抱いてきたということでしょう。そういえば今日も、これだけ多くの皆さんが智恵を求めてやって来ていますよね。もともとみなさんのふるさとはそういう世界なのです。

虚空蔵菩薩から智恵や知識、記憶といった面での利益を得るために修法である虚空蔵求聞持法は、作法に則って真言を100日間かけて100万回唱えます。修した行者はあらゆる經典を理解して忘れないといいま

こくぞうぐもんじほう

す。これに關係しては、空海が室戸岬の洞窟に籠もって虚空蔵求聞持法を修したという伝説があります。また、日蓮も12歳の時にこの修法を行っています。つまり、虚空蔵山は単なる山ではなく、信仰の山なのです。くり返しますけれども、この山はみなさんのように、智恵や知識を求めるべき人たちが拝まなければいけないのです。

信仰の場の景観

智恵や知識を持つことを願いとする、信仰の場所にお城がつくられる意味は何でしょうか、再度考えてみます。

次の写真は岩屋神社への参道です（図38）。私が虚空蔵山城に登ったのは2回です。写真をきちんと撮つてあるのは前回、松本市教育委員会と共に行った時のみです。麓には鳥居もあるし、雰囲気がいいですよね。次の写真は岩屋神社です（図39）。素晴らしいですね。なぜここが素晴らしいかというと、信仰の場としてるべき景観を全部もっているからです。

虚空蔵山は独立峰です。富士山もそうですが、日本人が長らく持ち続けた、高い山の上に神様が舞い降りてくるという発想法からすると、虚空蔵山のような独立した姿のいい山には、神様がおいでになるのは当たり前なのです。来臨した神様が籠られるのは岩で、一般的には磐座と呼ばれます。神様は大きな岩に籠もっておいでなのです。

分かりやすい例でいいと、諏訪信仰は本来守屋山という山と水分の信仰です。上社の代表的な社である磯並社は、巨大な岩を磐座としています。もっと分かりやすいのは戸隠信仰です。戸隠山はあのギザギザ尾根を持つ独立峰です。戸隠の名は天照大神が高天ヶ原の天の岩戸に隠れたとき、天手力雄命が投げ飛ばした岩戸によるといわれるよう、山全体が巨大な岩（天の岩戸）に見えます。高い山で独立峰、しかも目立つ巨岩のある山、だから神様がやって来るとして信仰されているのです。私が行っている飯山市的小菅神社も同じく岩山と水の信仰です。

岩屋神社は美しい山容を持つ独立峰の虚空蔵山の中腹にある巨大な岩の岩陰に建物がつくられています。まさに日本人にとって神様がやって来ると考えられていた典型的な場所なのです。この岩屋神社の風景を思い出していただきますと、全国各地の重要な宗教施設の多くが岩陰につくられている理由が理解できるで



図38 岩屋神社の参道入口



図39 岩屋神社

しょう。ですから、みんなの虚空蔵山は決して特殊なものではなくて、まさに日本人の心のふるさとかもしれないのです。

次の写真は頂上に上がって行く直前の状況です（図40）。いよいよこれが頂上です（図41）。山頂は見ての通り平らになっています。本来のお城では防御のために主郭の周囲には土壘を築いて攻められないようにするのですが、ここには土壘の痕跡がありません。ここは山頂からの景色が非常に良い。しかもすぐ近く



図40 峯ノ城の副郭と土壘（左側）



図41 虚空蔵山山頂（峯ノ城主郭）

にこのような巨大な岩があります（図42）。先ほど言いましたように、岩がある所に神様は来臨されます。みなさんがいくつかの神社へ行きますと、大きな石のある場所にわざわざ祠や本殿が設けられたり、岩がない場所では場合によると船の格好をした石が持ち込まれているのをご覧になれると思います。

中ノ陣城

では一気に中ノ陣城まで降りましょう。

中ノ陣城は発掘した場所から少し西側に行った所にあります。中ノ陣城背後の堀切から撮ったのが次の写真です（図43）。前の方に巨大な土の壁のようなものが見えます。おそらく本来はこの壁の手前に巨大な堀切があったはずですが、ここに至る道をつくった時にブルドーザーで埋めてしまったようです。つまり、城の設計者は尾根伝いに背後から攻められたら困るので、主郭背後にわざわざ土の大きな塁、土壘をつくって、その背後には大きな堀切を設けたのです。それを私たちちは堀側から見ているわけです。

背後の土壘を中ノ陣の主郭の内側から見たのが次の写真で、奥の高い所が土壘です（図44）。攻め込まれないようにするために、敵が攻めて来る可能性の最も高い場所、あるいは攻め込まれると弱い場所に防御装置をつくりますから、ここでは山伝いに攻めてこられたらいけないと思って山の側に土壘を巻いたわけです。中ノ陣城が後ろの虚空蔵山と本当に一体のものだとしたら、わざわざここに堀切を設けたり、土壘をつくったりする必要はないだろうと思います。

中ノ陣城の主郭を設けるために築いた石垣は、次の写真のようになっています（図45）。少し崩落している箇所もありますが、私の感じでは桐原城の石垣によく似ていると思います。逆に、今回発掘調査したこれから東側にある石垣とは相違があるように感じます。

会田の住民は御柱に参加していた

ところで、会田という場所をお城という側面だけではなくて、もう少し広く見た場合、どんな歴史があるのかについて触れましょう。

諏訪大社の御柱には、今は諏訪郡の人たちだけが参加していますけれども、武田勝頼の時代までは信州全



図42 山頂の岩場と会田盆地の眺望



図43 中ノ陣城の土壘（背後から）



図44 中ノ陣城の主郭



図45 中ノ陣城の石積み

体で奉仕していました。それは諏訪大社が信濃国の一宮、信濃国にとっての氏神の位置づけだったからです。現在の長野県の中で、中世に参加してない所があるのですが、ご存知ですか。そうです、木曽の人たちだけが参加していません。この理由は木曽がもともと信濃国ではなかったからです。木曽は美濃国だったのが、正式には江戸時代から信濃国に入ったので、中世には国が異なっていて奉仕する必要がなかったのです。

享徳4年7月30日（1455年9月20日）に上社が明年の三才山頭役を会田郷・岩下入道に賦課しました。応仁元年7月30日（1467年9月7日）にも同様の賦課がありましたが、岩下滋野満幸が同年12月14日に海野において討ち死にしたため、子息が2歳で御頭を勤めました。文明11年7月30日（1479年8月26日）にも海野下野守氏貞に命じられ、小岩井郷一郷のみで御頭を勤め、余郷は勤めませんでした。文明17年7月29日（1485年9月17日）にも賦課がありました。元亀元年4月7日（1570年5月21日）には上社五月会御頭役を会田郷が勤めました。天正6年（1578）2月には上社の大宮の御門屋の負担を「会田五ヶ所」が分担しています。天正9年（1581）には上社の御頭役を会田郷が分担しています。このように、諏訪大社のいろいろなお祭りにこの地域会田郷の住民はずっと奉仕してきたのです。

諏訪大社のお祭りの負担は領主がやるのでしょうか、それとも村人なのでしょうか。変な言い方ですけれども、現在の御柱は市町村が主体になってやっているのでしょうか、地元民が中心になってやっているのでしょうか。当然地元の人たちですよね。ですから、上社の御頭役を会田郷が負担しているというのは、会田の郷民、村人が主体になっているのです。祭礼を信州全体で負担する時に村が負担しており、村では住民に役割分担をしていたのです。

郷は自治組織として存在しており、財産も持っていたのです。私たちの会田は中世においても独立した郷として、領主とは関係ないところで自治を行っていたと私は強調しておきます。

しなの国道者之御祓くはり日記

四賀地区にはとんでもない史料が残っています。それが「しなの国道者之御祓くはり日記」（信濃国道者の御祓い配り日記）です（図46）。表紙の写真を見て頂ければ分かりますように、「志」という字を書いて「し」、「奈」の字を書いて「な」、「乃」を書いて「の」、これで「信濃」と表記しています。武田家が滅亡する前年の天正9年（1581）に宇治久家という伊勢神宮の御師の書いた、伊勢神宮のお祓いと土産物を地元へ配った、その時の日記です。これは文字からしても、紙の状況からしても、間違なく当時のものです。これは素晴らしい記録で、普通の村にはこんな良質の史料がまず残っていません。地域としてこれを持っている四賀のみなさんは幸せです。

この記録にはどういうことが書かれているかというと、会田に関しては例えば岩下殿、先ほどから何度も出てくる会田の殿様・領主です。その岩下殿には熨斗1把、鰯節5つ、上のお茶が10袋贈られています。熨斗がどういうものか分かりますか。本来、熨斗はアワビの肉を薄く削いで、干して生乾きになったら竹筒で押し伸ばし、更に水洗いと乾燥、押し伸ばしを交互に何度も繰り返して作ります。熨斗は古来より縁起物

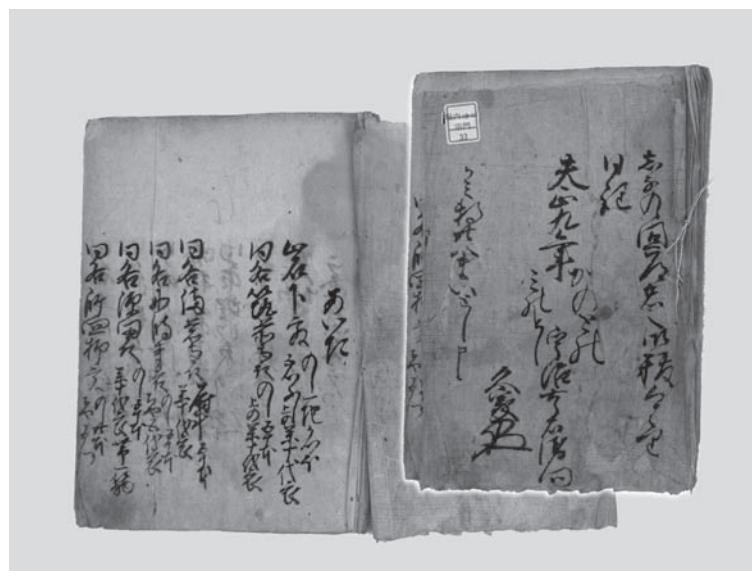


図46 天正9年「信濃国道者の御祓い配り日記」
(松本城管理事務所蔵)

とされ、神饌として用いられてきました。伊勢神宮へは現在でも鳥羽市国崎町から献上されていますが、それを土産として持って来たのです。わざわざ伊勢國の方から来るわけですから、できるだけ軽くて運びやすく、なおかつ価値のあるものを持って来たのです。

当然のことですけれども、道者は配る以上お礼のお金もあって帰らなくてはいけません。筆頭の岩下殿にはこれだけ贈り物をしているのに対し、2番目の同名筑前守には熨斗を50本、上の茶を10袋となっています。岩下殿には鰯節を5つ渡していますから、岩下殿の方が当然格上です。さらに3番目の筑前守には熨斗50本、お茶は上の茶でなくなっています。こういうランク付けがありました。

会田では岩下姓の者がたくさんいますので、岩下一族が大きな勢力を持っていたといえます。

その次に、鳥羽勘丞のところには熨斗が20本とお茶が5つ。それから同名与三右衛門殿にも同じように渡しています。藤松さんという人もいます。

宗教関係者と職人

これだけ多くの人名が記されている中で、特に注目したいのは、宗教関係者と想像される人たちです。

先達にはお茶を3つ、ぐっと少なくなっていますが、わざわざお茶を渡しています。先達とは、他の人より先にその分野に進み、業績・経験を積んで他を導く人のことで、山伏や一般の信者が修行のために山に入る際の指導者をいいます。ですから、宗教関係者が会田に住んでいたといえるでしょう。次に同じく会田では宿縫殿助殿にお茶を3つ、それから下ではもう名字がない人物たちにお茶3つ、六郎左衛門にもお茶3つ、「この人は我等被官。一別に目をかけ候」と説明されています。つまり「この人は私の家來で、特別に目をかけている」というのです。だんだん下になるとお茶3つ、要するに軽くなっています。

これで終わりません。同会田分が15人です。^{ばんじょう}番匠小沢分。番匠というのは今でいう大工さんです。中世では番匠（木造建築にあたる職人）の中で一番上に立つ人が大工で、下には小工がいました。戦国時代頃にだんだん番匠という言葉から棟梁という言葉に変わり、さらに今のように大工という名前に変わっていきます。いずれにしても会田には番匠が3人もいるのです。

まだ会田分が続きます。「ゑけ寺」には上の茶を10袋、海苔も渡しています。で、「河原崎のりんすそ」と書いてあるのは「りんしゅそ」（隣主祖あたりでしょうか）で宗教者でしょう。「知見寺」も出ています。「ほうそうす」は、宝蔵主ではないでしょうか。「長安寺」も出ています。ここに番匠、大工が出てきます。「ふた寺」（補陀寺）と、「無量寺」も記されています。次に「宮本の宮坂殿」は、おそらく会田からすぐ下の宮本で、現在の神明宮に関係する人物でしょう。会田入の分でも同じように宗教に関係しそうな人が出ています。

会田入の分に「こうさい寺」が出てきます。さらに、鍛冶屋さん、「鍛冶屋在家助三衛門殿」と書いてあります。地名だけかもしれません。職人さんらしき人たちが見えます。

苅谷原の方に行きますと、ここにも名字を持った人たちがいます。宇治久家は会田の人たちの方には非常に気を使っているのに、武田信玄がお城をわざわざ手に入れたくらい重要な地点である苅谷原に気を使ってないよう感じます。

会田の経済力

これまで指摘してきた事実の意義は大きいといえます。つまり、会田にはお金持ちや領主がいるし、職人もいたのです。一般的な村だったら職人さんたちまでが、これほど住んでいるわけがありません。それからあんな多くのお寺さんがあるわけがないのです。その上に郷として自治があったのです。

ここはいくつも問題があります。まずひとつ、この地域は私が見る限り大きな農業地帯ではありません。もし虚空藏山全体が連携するお城だとしたら誰がつくったのでしょうか。多くの経費を使ってたくさん城

を築き、しかもそれを守るだけの価値があるのでしょうか。先ほどの話のように会田には大きな領主が何人もいたみたいです。しかも、ここは町化していたのです。少なくとも職人さんたちが住んでいます。職人さんたちは一般的な村ではこれほど多く住んでいません。こういうことを全部含んでみると、この地域はいったいどこに経済力の源泉があったのかと、私は考えてしまいます。

そこで先ほどの竹原さんの質問が気になってしかたありません。最初の課題は、なぜ建物が1回しかつくられていないのかです。しかも、あれだけ大規模に造成して、なぜ小屋のレベルなのかです。次に、何故あのような石垣、つまり他のお城の石垣と違う技法の石積みがあそこに築かれているのかです。さらに、どうしてお茶の道具がある地点で発掘されたのか。あそこでお茶をしたと考えるのか、そうでないと考えるのか。それぞれのものの考え方によって、解答もずいぶん違ひそうだなあと私は思いました。

戦争は良くない

お城は本来戦争のための施設です。一番いいのは戦争しないことで、武器を必要としない社会を作ることです。このことは是非とも覚えておいていただきたいと思います。

今若い女性の中に「レキジョ」なる人たちがいるみたいですね。これを聞いた時は、「烈女」と間違えて、気性の激しい女性、強い女性だと思っていたのですが、「歴女」で俗に歴史好きの女性、特に戦国時代の武将などに関心を持って、時代小説や史跡めぐりを好む女性のことだそうです。実際、歴史が好きな若い女性たちがタレントとして歴女であることを売り物に活躍しています。ひょっとしてこの中にもおいでになっているかもしれません。上田市は真田幸村で売っています。上田市と真田幸村の活躍がどのように関係があるのかといえば、ほとんど関係ないですよね。しかも、今戦国武将として一番人気があるのが伊達政宗と幸村だそうです。これはゲームの結果としてかっこいいからの評価のようです。

大変失礼ですけれども、私は人殺しを商売とする武将たちが格好いいと思われるような世の中をつくりたくないと思っています。私は戦争の中には巻き込まれたくありません。また、いくら戦争があっても私は人殺しを是認しませんし、戦争に加担しません。

戦乱から避難する山小屋

そこで、みなさんにあえて尋ねたいのは戦争が始まったらどうするかです。戦国時代、武田信玄や上杉謙信が戦争していました。あるいは、天正10年以降にこの周辺で大きな戦争の可能性がありました。もし自分たちの住む地域が戦争に巻き込まれそうになったら、民衆はどのようにして安全を確保したのでしょうか。皆さんならどうしますか。

ひとつの可能性として私が主張しているのは、戦争から逃れて山の中に逃げ込むことです。織田信長のことを書いた『信長公記』によれば、武田家が滅亡した天正10年に信濃の人たちは戦乱に巻き込まれまいと山小屋に身を隠しています。武田信玄のことが詳しく書かれている『甲陽軍鑑』などを見ても、一般の人たちは山の中に小屋を設けて隠れています。戦乱から身を隠す場所を山小屋と称している例が古文書や伝承から知られます。村ごと山小屋などの避難場所を設けて逃げ込み、戦乱とは関わりないとして安全を守るわけです。もうひとつは村全体がお城の中に入ってしまえばいいと思います。塩尻市には北熊井城というとんでもない大きな城跡があります。あまりに大きすぎて、5万分の1の地図を見れば郭が分かるくらいです。何の証拠もないのですが、この城には村全体が入っていた可能性があります。ともに、私たちの安全は私たちが守りますと、村人が用意した施設があったことを前提にします。

秋吉砦と中ノ陣城の縄張りや規模からすると、その中間にあれだけの石積みを築き、平場をつくる必要はありません。石垣の技術も異なり、全体が一気に作られたものとは思えません。こうしたことからして、今

回の発掘箇所は村人が逃げ込むためにつくった装置である可能性はないのでしょうか。つまりここはさまざまな勢力の交わる地点ですから、住民が大規模な戦争に巻き込まれる危険性のあった地域です。戦争で生命が危なくなる可能性があるわけです。戦争が起これば巻き込まれて住民の家に火がかけられます。それならば、いざという時には山の中に逃げようとすると、そのための施設が必要です。

虚空蔵山は信仰の場ですから、武士たちも神仏のことを考えてあまり乱暴はしないだろう。しかも、あそこは沢があり、水もある程度確保できます。そこに一時期逃げ込めば、どうせ戦争なんて何年もやるわけがないから助かるだろう。

よくよく考えてみてください。戦国時代といつても戦争を行っているのは点にすぎません。しかも一時にすぎません。危ない時に、戦争に巻き込まれないようにすれば、しばらく経てば戦争も終わります。

戦争を避けるとき、人びとは何を持って逃げるのでしょうか。当然ですが大事なものを持っていきます。大事な物の代表は何でしょうか。私は来年の農業をするための種糲やさまざまな種子などだと考えます。しかし、こうしたものは一時的に逃げた後、逃げ込んだ人びとによって全て自宅に持ち帰られます。ですから、発掘結果としてこうしたものはでないでしょう。確かに中ノ陣城から炭化米が出ています。あのような炭化米を戦争に際して、食糧用に備蓄した米が炭化したと考えるのか、それとも従来のように城に火を付けられて炭化したと考えるのか、さらには種糲用だったのかも考えねばなりません。戦争が終わった際、場合による領主が種糲などを配布しなければ、農民たちは農業をできない可能性もあります。領主は農民が農業をしなかったら、収入がなくなるかもしれません。戦争に際して領主は戦乱から避難した人びとに何をしなければいけなかつたのか、そういうことを考えたいのです。

民衆と山城

先ほど竹原さんの報告にあった陶磁器、お茶の道具ですが、今回の発掘地点まで行ってわざわざお茶を点てて飲みたいと思う人がいるでしょうか。中ノ陣城と秋吉砦の間、あの狭い場所でわざわざお茶を点てるというような生活をする人がいたのか、私には疑問です。むしろ財産として持っていたものが壊れたので、置いてきたのではないでしょうか。

私たちはもう一度会田郷民の生活を中心にして歴史を考えないといけません。会田郷の郷民たちにとって、戦国時代とはいってもどのような時代だったのでしようか。厳しい戦乱から逃れるため、一時的な避難場所を用意するために、住民自らが動いた。石垣も専門にこれを行っている人たちでなく、地元の人たちが積んだので、あのような低い技術レベルだとは考えられないでしょうか。本来の城の石垣の技法と違うのは、百姓たちが見よう見まねでつくったのが理由の可能性もあります。あそこにはすごい人力が加えられています。先ほど竹原さんが言ったように、わざわざ版築といって、土をたたき締め、その上に土を置き、さらにたたき締めるといった技法も用いられています。しかし、一般の人たちは領主の城づくりに動員されたはずですから、それを通じて技術を見、それをまねた可能性もあります。

そうはいいながら、お城とお城の間の空間は安全とみるか危険とみるか、二つの考え方があります。一般の人たちは自分たちが危険になったら、お城に入れるとして保険のようなつもりで、城づくりに参加していた可能性があります。後ろに刀を持った武士がいて、脅しながら一般の民衆に城づくりをさせていたわけではないでしょう。武士は人口の1割程度ですから、もし一般の人たちが城づくりにおいて反乱を起こしたら、これを止めることはできません。一般の人たちが率先してお城づくりに参加する理由は、いざという時には自分たちもこの中には入れるという、安全確保のためだったのではないでしょうか。そういう観点で見ると、今回の発掘結果を含めて、私たちの会田及びその周辺地域は、まだまだいろいろなことを考えていくための材料がありそうです。

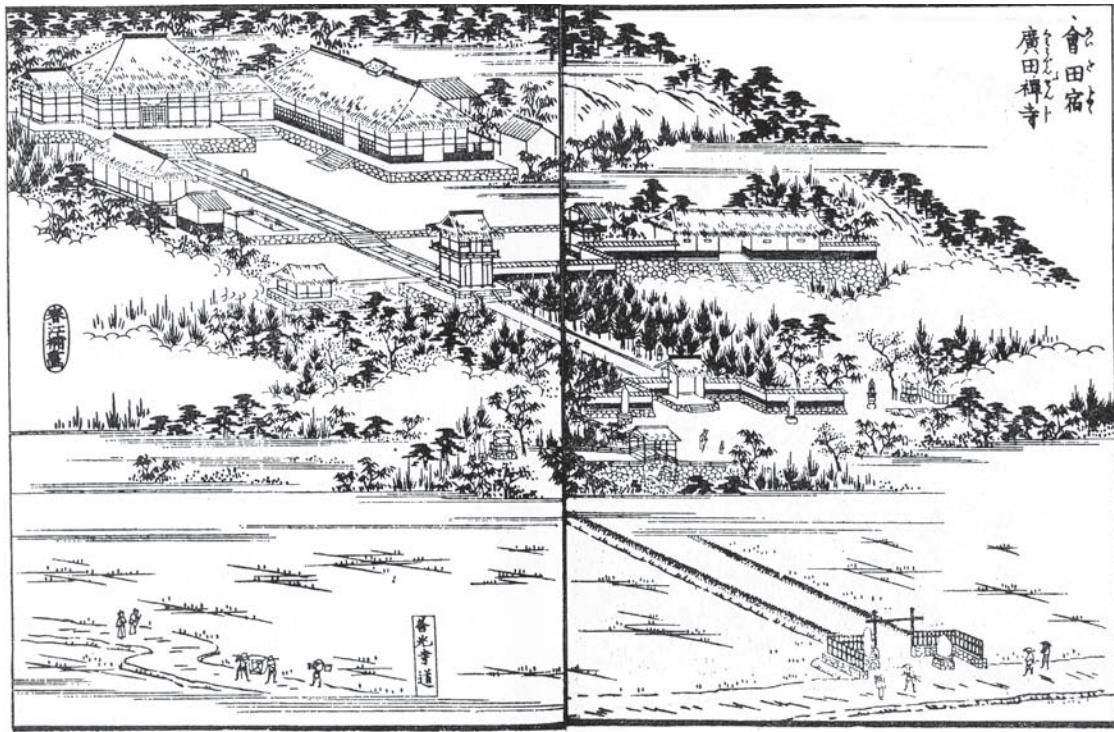


図 47 廣田寺の風景（『善光寺道名所図会』より）

ふるさとを見つめ直す

次は嘉永 2 年（1849）に書かれた『善光寺道名所図会』に見える、先ほど触れた知見寺の後身、江戸時代の廣田寺を描いた絵ですが（図 47）、これだけ大きなお寺がつくられたことの意味は大きいですね。山門や本堂などこれだけの規模のお寺は、そう簡単にできません。背後には豊かなこの地域の経済力があったのでしょう。改めて私たちは私たちのふるさとが、歴史の中でどれくらい重要であったのか考えなければいけません。

次の絵は同じ本から、江戸時代の岩井堂観音の風景です（図 48）。岩井堂の場合も、先ほどの述べた虚空



図 48 岩井堂の風景（同上）

蔵山の神が降臨する風景を前提に理解が可能です。岩井堂でもお堂の裏には巨大な岩があって、まさに神が来る場所です。ですから、あの場所にお堂が建設され、神の来る岩に仏像が彫られたのです。このように、私たちのふるさとには日本人が神様や仏様をどういう場所に感じたのかを考えさせてくれる、歴史遺産がいっぱいあるのです。

会田氏の館跡と言わされてきた殿村遺跡は、掘れば掘るほどその性格が不明になります。けれども、掘れば掘るほど遺物を通して分かってくることが多いのです。その一つが、間違いなくとんでもない土木量を実施したということです。あれだけの土木量は、今日ここにいるみなさんへ鍬と畚もつこを道具にして、ただでやれといわれて参加し、達成できるようなものではありません。私は日当がもらえたとしても、ご免被りたいですね。ともかくすごいのは、あれだけの土木をしてしまったことです。

そして、殿村遺跡はお城や館の概念から外れています。可能性としてはお寺の跡の方が強いです。お寺だったとするならば、なぜ私たちのふるさとにはあれだけの土木量をこなしうる財力を持った、あるいは人びとを動員できるだけの魅力を持ったお寺があったのでしょうか。

いわゆる殿村遺跡は、単なる点としてしまっては理解ができません。殿村遺跡から背後、虚空蔵山に至る全域が宗教ゾーンとして存在し、その中でそれぞれの地はどのような役割を持っていたかを考えることが重要です。会田氏館跡といわされてきた場所はどのような特性を持っていたのでしょうか。中ノ陣城や秋吉砦は何を守ろうとして築かれたのでしょうか。そして今回発掘された平坦地はこの地域全体の中でどのような役割を負っていたのでしょうか。私たちは発掘した点でものを考えるのではとても足りず、ふるさと全体を面として捉えていかなければいけない時期にきているのです。

普請の意識

それに際して、なぜあれだけ大きな大地改変をして、その主体者は恐怖心を抱かなかったのでしょうか。現代に生きる私たちには思いもよりませんが、中世においては土を動かし、大地を改変することは怖いことの一つでした。中世ではお城を築く、あるいは松本城をつくるという場合には、二つの要素がありました。ひとつは普請です。石垣をつくったり、堀を掘ったりする、土木工事を普請といいました。その上に建物、天守閣のような建物を建てるのですが、これを作事と呼びました。普請と作事がセットになってお城はつくられるのですが、「城作事」という言葉は用いず、「城普請」という言葉しか残っていません。城づくりでは台地を改変する方が重要だったので、城普請の言葉が残ったのです。

みなさんが普請という言葉を使う時、道普請という言い方があります。こうした大地に手を入れる普請は、本来普通の人がしてはいけない行為でした。これは大地の中に神がいるので、神と連絡が取れる特別な人だけが行えるものだと理解されていたからです。普請に際しては陰陽師おんみょうじや修験者しゅげんじやなどが参加していました。ですから、大地に穴をあけたトイレや井戸などを埋める時には、神と連絡を取り、神をなだめ行為の承認を得る特別な儀礼をしているのです。

それなのに、あの時代にあれだけの工事をして何とも思わなかったのは、やはり神仏と人間の間に立てる宗教者たちがいた、あるいは僧侶による宗教行為だったから、恐怖心がなかった可能性があります。

経済力の源

それでは、どうしてあれだけの工事ができた財力がこの地で持てたのでしょうか。ひとつはここが交通の要衝、すなわち後の善光寺街道の重要な地点であったためです。街道を押さえることで領主は関税などを得ることができますし、住民は宿場を通して潤います。しかし、これはまだまだ理由の一端で私たちが理解していない、山を背後に置いた経済活動がたくさんあるように思います。

また、誰があれだけの工事を実際に担当したのでしょうか。先ほどの学校跡地の大量な土木量、あれは会田の人たちだけで行ったものなのでしょうか。さらに、その背後に設置された山城などをつくったのは、地元の人たちだけの参加だったのでしょうか。それともこの地の経済力を前提にして、他所から多くの労働者を引き込んだのでしょうか。こういうことも考えなくてはいけません。

虚空蔵山城とは何か

私たちは虚空蔵山城と簡単に呼んでいますが、本当に城なのでしょうか。重要なのは虚空蔵菩薩が祀られている場所に城がつくられたことです。これと似たようなことは、善光寺及びその寺域が上杉謙信によって何度かお城に使用された点にも見られます。善光寺の東側の高台を城山といいますが、ここはお城だったのです。重要な宗教施設がお城になる時、宗教施設の意味はいったいどこにあったのでしょうか。まだ私たちは分からぬことがあります。しかも、私たちは現代に生きていますので、社会も価値観も違う中世人の心の内が理解できているとは限りません。私たちが勝手に解釈しているだけで、事実は全く異なるかも知れないのです。

そういう意味で、虚空蔵山城とはいったい何だろうか。先ほどの通り中ノ陣城・秋吉砦から峯ノ城まで全部を含めて呼ぶべきなのか、それともひとつを区別して評価すべきなのか、この解答もできていません。くり返しますけれどなぜ戦国時代会田はあんなに町化できたのか、なぜ職人がいたのか、なぜあんなにお寺が多いのか、分からぬことばかりなのです。

みんなで学びましょう

私たちが持っているのは学びの材料です。文化財とは何か、発掘調査をするとは何か、遺跡を残すとは何か、すべては学ぼうとするかしないかで解答が違ってきます。考える材料をどれだけ持っているかによって、私たちは正しい解答に近づけるのです。

ところで、発掘調査という響きはいいのですが、実際には遺跡を壊すことです。1回掘ってしまったら、それ以上の調査はできません。掘り上げた遺物の調査ができるだけです。多くの場合、発掘技術などは時代とともに高度になってきています。殿村遺跡において発掘調査が行われているということは、私たちにとって誇るべきですけれども、同時に一回大地からの訴えを見失うと、二度と声が聞こえなくなる覚悟を持たねばなりません。

松本市は学校をつくろうとして発掘を始め、そして重要だからということで残すことを決め、さらに調査をしています。このことの意味をまずはみなさんに確認していただきたいのです。市が多く予算を費やして地域の歴史が分かるように発掘調査をし、その場所の保存を決めたと言う意味で、みなさんのように恵まれている人たちや地域が松本市内どれだけあるでしょうか。これほど多くの勉強できる材料を提供されている人たちがどれだけいるでしょうか。しかも、さまざまな問題に対する解答はまだできていません。

この地域で、いいなあと思うことはよく勉強している人たちがいっぱいいることです。先ほどの竹原さんは、事実をみなさんにいっぱい伝えようとしていました。現地見学へ行ったことのある人はあそこで何が発掘され、何を説明しようとしているかを、身をもって実感できたと思います。私たちは、これまでの発掘を通して学びのための材料をたくさん得ましたが、発掘は点に過ぎません。虚空蔵山から始まって、私たちがふるさと全体を本当に学び尽くしているか、学ぼうとしているかというと、まだまだのような気がします。

「しなのの国道者之御祓くはり日記」については、戦国時代にこれだけ地域のことが分かる史料を持っている地域は希有です。この史料はまさに市民全体の文化財です。わざわざ伊勢神宮からやって来た道者(御師)が、会田の周辺にはこれだけ配り物をしましたと記録しています。当然、これに見合うだけの利益を得てい

たはずです。勢力を持っていた家も、そのランクも分かれます。この記録が作られた天正9年という時点では、私たちのふるさとはどんなだっただろうと想像することも大事です。

未来に向けて

最も大切なことは、これだけの美しい景観を私たちは今持っていますが、これをどうしたらいいのか考えることでしょう。みなさんは子孫に何を残したいのでしょうか。私たちの周囲にあるこの美しい景観は、しばらく経つと一変するかもしれません。稻さえも作られなくなるかもしれないです。秋の実りの時期、あの黄金に輝くこの田んぼから始まってこの美しい傾斜地、そして虚空蔵山、全体が私たちにとっての宝物なのです。とりわけ、私たちにとってこの景観は大切です。大変失礼な言い方ですけれども、私はあの会田の学校の跡地そのものよりも、ここ全体をどうやって残していくかということを考えていくべきだと申し上げます。点を残すのではなくて、面を残すべきです。

この美しい景観を残せる可能性はあります。その手段のひとつが国の文化的景観の指定を受けることです。それだけの要素がこの地域にはあると私は思っています。その際、背後の山、そして交通の要衝としての道、かつて宗教施設がいっぱいあった、こういうことをまずは会田のみなさんをはじめ、旧四賀村の人たちが誇っていただきたいものです。そして旧松本市の人たちには、この地域が入ってくれたことによって、松本の文化がいかに豊かになったかということを理解してほしいものです。

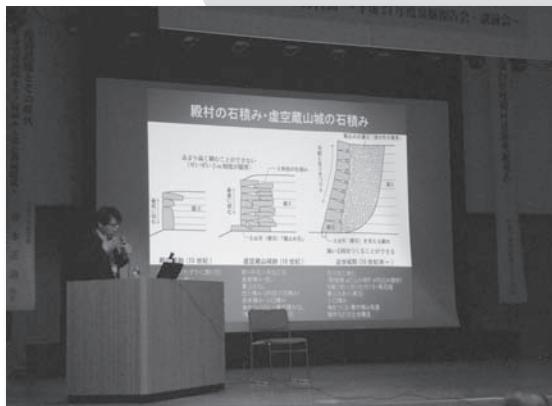
そういう意味でも、みなさんこの景観を残したいと思いませんか。100年先、200年先にこの景観を残すために、私たちはどれだけの努力をしてきたか、これからどれだけ努力するかが、おそらく将来問われることでしょう。そして、みなさんが日々仰いでいるのは智恵の神様、智恵の仏様のおわす虚空蔵山ですから、私たちが方策を考えねばなりません。私たちは祖先からの文化を引き継いでいます。しかし、私たちは子孫に対して新たな文化を作り譲り渡そうとしているのでしょうか。子供たちに、孫たちに、今を出発点として新しい文化を加えていくための努力をしなければいけません。

私たち一人ひとりが学ばなかったら、ふるさとはよくなりません。学ぼうとしなければ未来は見えてきません。未来は過去の上にあります。過去をきちんと見据えた上で、現在を分析して、将来を築いていくしかありません。私たちのふるさとの何が優れていて、何が欠けていたのか、これを一人ひとりがしっかり考えることによって、智恵が磨かれるのです。みなさんにあってこの大事な風景、大事な学びの場、それを将来に残すためには、みなさん一人ひとりがまず学ぶしかありません。日々、虚空蔵山を単に拝むだけではなくて、虚空蔵山そのものを学び、私たち一人ひとりが責任を持って智恵を持ちたいものです。そして、歴史を大事にしたうえで、未来をつくっていきたいと思います。私たちは今回の発掘調査を通じていろいろなことを学ばせていただいている。またいろいろな可能性を信じていますが、現時点では結論が出せません。

みなさんとともによりよい未来をつくっていくために、まずは戦争の武器ともいえる城のない時代をつくりたいですよね。戦争のない時代をつくるためにも、戦争遺跡の確認と調査は大事です。戦争の道具や遺跡を持たないでいられる時代をきちんと創造していきましょう。そして先ほど見たあの平和な空間が100年、200年先に続くように、お互いに努力しましょう。

私はたまたま殿村遺跡の調査指導委員会の委員長という立場にいますけれども、私がやらなければいけないことは、次の時代に向けてこの遺跡をいい形でバトンタッチしていく、学びのための契機をつくっていくことだと思っています。

時間がきましたのでこれで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。



殿村遺跡とその時代Ⅲ

—平成 24 年度発掘報告会・講演会の記録—

発行日 平成 26 年 3 月 28 日

発行者 松本市教育委員会

〒 390-8620

長野県松本市丸の内 3 番 7 号

印 刷 精美堂印刷株式会社